

新しい年を迎えたばかりのこの時期、浜松市の小学校で起きたノロウイルスによる食中毒は、給食の食パンが原因だったようです。嘔吐（おうと）や下痢などの症状を訴える児童らは千人規模となり、製造元は一般商品の回収にも追われる事態に発展しました。



教職員十七人は給食を食べ、この十七人の便からノロウイルスが検出されたと発表し、市保健所は二十二日の給食が原因の集団食中毒と断定しました。このように、ノロウイルスを原因とする「おうと」や「下痢」などの健康被害が発生しています。

☆発病すると通常は、症状が一日か二日続いた後治ります。後遺症もありません。また、感染しても発症しない場合や軽い風邪のような症状の場合もあります。

☆ただし、幼児や高齢者など体の抵抗力が弱っている方がノロウイルスに感染すると、重症になることがありますから注意してください。

☆体調が悪いときは早めに医師の診察を受けましょう。

☆ノロウイルスの感染力は強く、ほとんどの場合、口から体内に入ることにより感染します。

☆ノロウイルスには、有効なワクチンも特効薬もありません。感染予防の基本は「手洗い」です！



ノロウイルス対策

感染予防の基本は「手洗い」です！

東日本震災復興



(高橋英悟住職)

東日本大震災：2年半 大槌・吉祥寺 身元不明の遺骨22柱／岩手

東日本 大震災から11日で2年半。県内で身元が分からない遺骨71柱(8月末現在、警察庁調べ)のうち22柱を大槌町吉里吉里の吉祥寺が預かっている。住職の高橋英悟さん(41)が名前を取り戻せない遺骨に語りかける。「心配しないでずっとここにいていいんだよ。静かに眠れる場所を提供し、安らかに祈り続ける。【安藤いづ子】

寺の「開山堂」。檀家(だんか)の位牌(いはい)を安置する棚の手前に、身元不明者22人の骨箱を置いている。「天気いいね」「今日も頑張ろうね」。高橋さんは毎日午前6時半、骨箱に手を触れ、優しく声をかける。「私にとって家族みたいなものなんです」と話した。

寺は高台にあるため津波の被害は免れ、震災直後から避難所として開放した。犠牲者の供養のため、震災5日目によく遺体安置所の町立吉里吉里中学校の体育館に行くと、約180人の遺体がシートや毛布に包まれ並ぶ光景を目の当たりにした。ある女性のためお経を上げていっていると、捜していた夫と子どもが歩み寄ってきて号泣した。こんな悲しい対面があるなんて……。涙があふれ、読経を続けられなかった。

寺の本堂に骨箱が次々運び込まれた。身元が分かり、少しずつ減っていく中で、引き取り手を待ち続ける遺骨が残った。家族を捜し続ける被災者はまだ多い。寺を訪れ「自分の大切な人かもしれない」と遺骨に手を合わせる人もいる。そんな人のためにも高橋住職の供養がある。【毎日新聞 岩手版】

ノロウイルスを正しく知って、感染を予防しましょう！

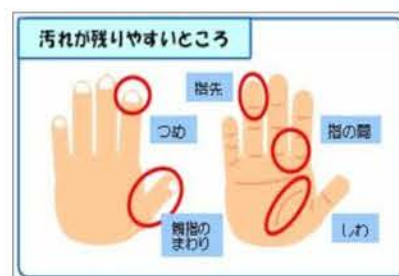
- ・ふん便などの処理が不適切だったり、タオルの共用などにより、手指がノロウイルスに汚染され、その手指が口に触れて・・・感染！
- ・床などに残ったおうと物が乾燥してノロウイルスが空中を漂い、これを吸い込んで・・・感染！

ノロウイルスを正しく知って、感染を予防しましょう！

- ・ノロウイルスに汚染された食物を、生や加熱不十分のまま食べて・・・感染！
- ・ノロウイルスは、ほとんどの場合、口から体内に入って感染(経口感染)します。

ノロウイルスは、ほとんどの場合、口から体内に入って感染(経口感染)します。

食事の前やトイレの後などに、石けんでしっかりと手を洗うことは、ノロウイルスの感染予防に大変有効です！



など直接触れないように注意しましょう。

また、処理した後は、石けんでしっかり手を洗い、うがいをしましょう。

手を洗う時は、腕から指先まで、しっかりと洗い、こすり洗いをしましょう。

機 鋒

TOUGEN NEWS

1月1日(土曜日)

発行所 桃源院
発行責任 桃源院 広報部
〒191-0065 日野市旭が丘1-10-4
編集 桑原賢龍 田中高文
桃源院アドレス
<http://www.momo.or.jp/>



春風献上

桃源院本堂復興 再建委員会

本堂復興再建につきましては、檀信徒の皆様、物心両面からの協力に委員会一同心より感謝申し上げます。

さて、本堂再建の進捗具合ですが、選定した施工業者3社に対して現場説明会を実施し、その後、質疑応答を経て12月6日に見積書の提出を受けました。

平成26年1月1日現在、依頼している設計事務所にて、健全な施行が約束されかつ関係法規に照らし合わせて施工上の瑕疵がなく、かつその範囲で価格が適正であるかどうかの審査を進行中です。

【新本堂のCGによる予想図】



猛虎と猫児の禅味

鳥鵲を通じて遮欄を絶す

風外本高（ふうがいほんこう）（一七七九〜一八四七）

曹洞宗、伊勢(三重県)の生まれ。風外は号。八歳で出家し、諸方を歴參後、宇治興聖寺の玄楼奥竜に師事して法を嗣いだ。後に浪花の円通寺、三河の香積寺で大いに教えを広めた。その後、浪花の烏鵲楼に隠棲したが、請われて摂津の円通院、出雲の徳林寺の開山となる。書画にも秀でていた。

この年の正月十五日、
風外は寺で修行僧を集め
て解散を命じた。その寺
は三河足助（豊田市）の
曹洞宗の名刹香積寺であ
った。

たが、今後はそれぞれの
志す方に向つて善知識
（指導する僧）を求め、
専心学道するがよい」

風外は淡々として香積
寺での最後の言葉を述べ

「わしは八年間住み慣れたこの寺を去つて、浪花に隠棲する。なに、悲しむことはない、会うものは必ず離れる道理じや。お前たちは多年わしの随徒としてよく勤めてくれた。一語一語、重く七十八人の弟子たちの胸にせまり、満堂、寂として声なく水をうったようであつた。けれども和尚が隠棲するなら、その隠棲の地ま



毎年11月になると、香積寺のある香嵐溪はもみじまつりに訪れる人々で賑わいます。約4000本ものもみじが紅色に染まるさまはまさに圧巻。県内外から多くの人が訪れ、香積寺の25世和尚である風外本高は、書画に堪能で多くの作品を残しています。香嵐溪のもみじまつりの期間中だけ、収蔵されている書画を拝観することができます。

で後を追つて行きたいと申し出る者が二十人もいた。彼らは和尚が誠心誠意を尽くして説得しても、思いとどまろうとしなかつた。彼らの風外に對しての求道の赤心こそはまことにあわれであつた。

尚に迷惑をかけないから、どうか参禅を許してほしい」と言つて、動こうとしない彼らの心情はまことに純心であつた。しかしながら引退しようとする身には、その願いを聞き入れることができない。そこで風外は、さらに懇々となだめすかした。それでも彼ら二十人は離れようとは決してしなかつた。

風外が竹馬ちくばの友、島田
虎吉へ宛て書いた手紙が
ある。その一節にいわ
く、



「この泰田坊（風外）も西野々以来は他国坊主と相成り、西よ東よとうるたえ廻り、近年は坊主大將をして、うるたえ廻り、今年六十三に相成り、老病加わり候故、うるたえもこれきりに止める積り。これから大阪に隠居いたし、保養をして世を仕舞う積もりにて、此の正月十五日に、大衆五十人余りは残らず追っぱらい候えども、まだ二十人の者は離れ申さず困り入り申し候。」

そして、この手紙の終りに

諸ともに 同じうき世に長らへて
あわでわかるる 今日ぞ
あやなきこと

という一首が添えてあり、最後に

「正月二十四日、泰田事、風外坊主、嶋田虎吉殿、座右」とある。

も察せられるし、正月十五日から二十四日になつてもなお師のそばを離れようとせぬ二十人の弟子たちの頑張つた様子もよくわかる。また風外の困つた顔も想像できる。

結局、風外は不惜身命おしなをふしの修行僧二十人を伴い大阪の烏鵲楼うやぐろうへ移つた。この烏鵲楼は、大阪の豪商川勝太兵衛が風外のために建てた別邸であつた。

この川勝太兵衛が初めて風外を訪ねたとき、風外は障子にぶつかつてもがき苦しむ蛇カマエビに見とれていたという話がある。

・・今から二百年ほど前、風外本高という絵が上手で、ちよつと風変りな坊さんがいた。

大阪、円通院に住職していた頃の話。この寺は破れ放題に破れた荒れ寺だったが、風外はいつこゝうに頓着もなく坐禪と揮毫に余念がなかった。そこへ、大阪屈指の豪商川勝太兵衛がやってきた。

彼は商売の大きな悩みを抱えて進退に窮し、風外に指導を仰ごうと思つて来たのだった。

彼は自分の苦しい現況をとうとうと述べるのだが、和尚は真面目に聞いてくれない。

それに、和尚は先刻からあらぬ方向を見つめている。



一匹の蛇が障子にぶつかつては落ち、また飛び上がつては障子にぶつかつて落ちる。

それをジ―と見つめてゐる。たまりかねた太兵衛は、

「方丈様はよほど蛇がお好きと見えますなア」というと、

「おお、これは失礼」と言い、

「太兵衛どの、よくござんなされ。この破れ寺、どこからでも外に出られるのに、あの蛇、自分の出るところはこしかな」とばかりに障子にぶつかっては落ち、飛んではまたぶつかる。

このままだとあの蛇、死んでしまう。しかし太兵衛どの、これと同じことをやっている人間も多いでのう・・・」

この言葉を聞いて太兵衛、ガーンと頭を殴られた思いだった。



このようにして、風外の隠棲の場所、烏鵲楼に意気衝天の弟子たちが集ったのであった。しかもその学風は実に活達で自由だった。学人は規則にとらわれずのびのびと勉強ができた。その頃の風外に、次のような偈が一篇ある。

今夏の安居規則の外
正に烏鵲を通じて遮欄
を絶す
若し前後を將て纒かに
半を論ぜば
烈焰堆中深雪寒し

老僧を追ってここまでやってきた雲水たちは、もはや半夏（一年を二期に分けて修行する、その一期目の半分）を過ぎしまった。僧堂の半夏ならば、ここで半夏の祝いをやるとこであるが、そこが「規則の外」で、自由に托鉢して勝手に食するがよい。見よ、この楼にはたくさん烏や鵲がいて、飛び去り飛び来たる。まったく規則の外だ。柵もなければ柵（手すり）もない。何も遮るものはない。学人たちはみな「正に烏鵲に通じて遮欄を絶す」である。むしろその通り、君らもその通りである。

うであるのだと言い、半夏が過ぎたからどうのこうのと言つても、修行はまだまだ続く。こんなところで結論なんか出ないのだ。中途半端であるならば「烈焰堆中雪寒し」：炎々たる焰の中につまれた雪のようなものだ。雪は冷たい。雪の冷たさにがたがたふるえているようなものだ。おお、わが愛するけなげな学人たちよ、烈焰堆中に深雪を投ずれば、雪はたちまち融け去つて、天地いっばいの焰でなくてはならぬ。

学人よ、油と水であつてはならない。二見にわたることなかれ、凡夫の凡智を仏性の烈焰に投ずれば、たちまち消えうせて影も形も消えるのだ。これが烏や鵲の自在な飛翔であり、わが烏鵲楼の家風である。

洋々として海のような風外の面目と炎々たる烈焰の機鋒とが、ともにこれによつて窺われる。

後に、原坦山は風外を親しく慕つて、次のように言っている。

「大凡似て非なるものあり、真にして疑うべきものあり、類して弁ずべからざるものあり、但知者能く之を察す。」

これが序に当る部分。

次に風外和尚が描くところの虎の面に言い及ぶのである。風外が第一級の画家であつたことは古今周知の通りだ。その画のサインの「風外」の二字がたこ入道の形に似ていたから、風外のことを



「日者大珠山に至り、風外老師の描く所の虎を見るに、誠に真虎を見、哮吼を聞くが如し。余曾て外老師（風外老師）に侍す。師の居常溫柔にして、幽彩あり、殆んど猫児の弄翫すべきものの



世に「たこ風外」と言つたのである。

伏、是れ図画の及ぶこと能はざるところなり」

「余嘗て画虎を見る、其状猫児の如し。近世真虎を觀るに及んで、威猛獐烈、爪牙俊利、觸犯すべからず。其哮吼を聞くときは、山岳震動、百獸潜

ここまでは一般の論だ。坦山は明治の初期に東京帝国大学の教授になつた人、どこかで本物の虎を見て、その猛威に感じ入つたのであろう。

坦山はこの一文を書きながら、かつて烏鵲楼でめくら蛇におじずの譬えを地で行つて、猛虎の頭を三回叩いたことを思い出したであろう。

「熱汗背を 洩はしむ」の一句に万感の思いがこもっているのである。

風外が天保十一年の秋、雲州（出雲）の徳林寺に掛錫（寺に滞在すること）したときのことである。風外の熱烈な帰依者であつた勝部家へいつも出入する木村文泰という盲人の医者が出た。彼は針術の妙をきわめた者で、この地方で有名だつた。もと松江の藩医であつたが、後に坂田に住んで、勝部家の奥女中を妻にもらつたので、屋敷に懇意に出入りしていたのである。

ある日、文泰は勝部家へ施術に出かけて行つた。ところがその留守に、十七・八の美しい女性が出てきて、針を打つて治療をしてほしいと言ふ。

「主人はただ今不在ですが、多分、勝部家におりましよう。もし勝部家でなかったら、きつと徳林寺へ回つていると存じます」

文泰の妻ははいねいに教えてやつた。この若い女性はやがて徳林寺に現われた。文泰

はこの徳林寺にいた。
「あのう、私は松江の在の者でございますが、だいぶ前から頭痛に悩んでおります。先生のご高名を聞いて、針の治療を受けようと思って伺いました」
そこで文泰が乞われるままに、風外の許しを得て、女性を書院の一室に案内してまず脈拍をみると、実に容易ならぬ不思議な容態である。そこで首筋のあたりに針を打とうとしたが、驚いたことに触ってみると首筋一面に鱗があつて、どうしても針が入らない。仕方が無いので舌を出させ、その舌に針を打った。
風外は最初から怪しい気配を感じていた。そこでその部屋をそつと覗くと、治療を受けている美人は実は恐ろしい竜であつた。竜が書院いっぱいにとぐるを巻いているのである。やがて女は治療を終り、ていねいにお礼を言い、治療費を置いて立ち去つた。

「いまの若い女性はどうな兆候であつたかの」
「はい、私は目が見えませんが、あれは人身ではなかったようでございます」
「ふむ、よく気がついた。あれは竜神であらう。山陰随一の高山、大仙山の麓に赤松が池というのがある、古来竜神が棲むと伝えておる。お前の針術を頼つてやつてきたものと思われぬぞ」
「へえ、さては竜神でありましたか」
「いや、お前の針術は鬼神にまで感応したのじや。わしはこの目でそれを見たわい。しからばその姿を後世にとどめておこう」



風外はこの不思議のあつた徳林寺で授戒会を修した。そのとき竜は人身に化けてやつて来た。そしてうやうやしく戒壇に登つて血脈を受け、これによつて三熱の地獄の苦を脱却した。風外はこの

いっばい詰めかけたという。

風外はこの不思議のあつた徳林寺で授戒会を修した。そのとき竜は人身に化けてやつて来た。そしてうやうやしく戒壇に登つて血脈を受け、これによつて三熱の地獄の苦を脱却した。風外はこの

原 担山 (はら たんざん 1819-1892)

曹洞宗の僧。最初学んでいた昌平黌は今の東京大学の前身の一つである。当時、駒込の吉祥寺には梅檀林という駒澤大学の前身があり仏教を教えていた。両者は距離が近いこともあつて常に論争しあっていた。昌平黌に籍をおき、賭け問答で梅檀林の僧侶に負け、梅檀林に移り頭を丸めた。後に東京帝国大学インド哲学科の初代講師となり、近世洞門の禅傑といわれた。

まだ執着していたのか。

担山が修行仲間と行脚中、水かさの増した大井川の岸辺で、妙齡の乙女が川を渡ろうとしています。困っている様子。いまの女の子なら、裾をたくし上げて、堂々と渡るところでしょうが、昔の女性ですから脚を見せることすら躊躇したのでしょう。

すると担山が、その娘に声をかける。

「お困りでしょう。どれ、拙僧が渡してあげましょう。さあ、しっかりと私の肩につかまりなさい」というと、その乙女を軽々と抱き上げて、川を渡ります。その娘は、恥じらい、顔を真っ赤にしなが、御礼を言いますが、担山は耳もかさず、さっさと同行の友のあとを追います。

しばらく、二人は黙って歩きますが、その同行の友の雰囲気がおかしい。なにか無然として、不機嫌そうに歩いている。しばらくすると、もう我慢ならないという顔をして、怒り出します。

「お前は実にけしからん。出家の身として、また、修行の最中に、事もあるうに若い女を抱くと言うような、まったくそれでいいと思っているのか」と凄じい剣幕で言う。担山は、あたりを見回して

「なに、若い女？どこにいるんだ」

同行の友は、大いに怒り、

「とぼけるでない！さっき娘を抱いたではないか！」

担山は大笑いして

「なんだ、あの娘のことか。おれは川を渡してやって、おろしたよ。お前は、あれから、まだ、ズーと抱いていたのか」

旃崖奕堂 (せんがい えきどう 1805-1879)

曹洞宗の僧。能登総持寺独住の第一代。号は無似子。別に三界無頼という。俗称は平野氏、名古屋生まれ。天保十二年(1841)風外の印可を受けた。

明治三年(1870)大衆の推挙によって総持寺独住第一代となる。

禅師号は弘濟慈徳禅師。

世の中いろんなことがある。でもそれは一瞬一瞬で終わっている。

明治の傑僧に奕堂(えきどう)禅師という方がいた。ある冬の寒い朝、修行僧と共に座禅をしていた奕堂禅師は鳴り響いてくる鐘の音を聞いて「不思議なことだ。いつも聞きなれたはずの鐘の響きは、今朝に限って身に染みとおる厳しさを感じず」・・・

やがて部屋に帰った奕堂禅師は鐘をついた修行僧を呼びました。新米の小僧でした。

「今朝の鐘はお前がついたのか」

「はい」、撞き方が悪くて叱られるとでも思ったのか、小僧は平身低頭しました。

「いや、撞き方が悪くて呼んだのではない。お前がどんな気持ちで鐘をついたか聞きたいだけだ」

「はい、鐘を撞くのは仏の声聞くのだ、仏様を撞き出すのだ。だから一撞き、一撞きに心がこもらねばならぬぞ、と師匠が教えてくれました。今朝、初めての当番でしたので、師匠の教えを心に深く念じつつ、満身の力をこめて撞き、一回ごとに合掌礼拝したのです」

「そうか、その一瞬一瞬に全身全霊がこもる、それこそ禅の教えだ。その気持ちを忘れずに修行しなさい」

と奕堂禅師はさしました。

この小僧さんは後に永平寺六十四世の禅師となった、森田吾由禅師、その人でありました。

日本で2番目の「ラムサール条約」指定登録

冬の伊豆沼



伊豆沼 (宮城県)

日本は、釧路湿原を登録湿地として、一九八〇年にラムサール条約に加盟し、順次登録湿地を増やしてきました。「伊豆沼・内沼」は一九八五年に登録されました。

伊豆沼・内沼の生物で人氣があるのは、ガン・カモ・ハクチョウなどの鳥類。特にマガンは、宮城県北部だけに飛来する貴重な渡り鳥です。

その他にも魚類、昆虫類など多種多様な生物が生息しています。

鳥類は二百三十三種で、トンボ類は三十八種にのぼります。なかでも水辺を生息地とするイトトンボ類は、たくさん見ることが出来ます。魚類は十三科三十八種で、これらは大部分がコイ・フナ・ウナギ・モロコ・ワカサギなどの淡水の普通種。なかには、淡水のエビも生息しています。

湖水が夕日に照らされて、銀色に染まる秋から冬は、しばし静寂の時を迎えますが、やがて北国の空からマガンやハクチョウなどの渡り鳥が舞い降りてきます。何万羽という渡り鳥の群れは優雅で神秘的。静かな湖面は、渡り鳥たちの鳴き声

とともにいつそう華やかに変わります。

早朝、渡り鳥はエサを求めて一斉に飛び立ちます。朝日に照らされて飛び立つ様子は幻想的。

太陽が見えないほど霧が立ち込める日は、突然、霧の奥から鳥の鳴き声と羽ばたく音が聞こえたかと思うと、頭上を渡り鳥が羽ばたいていく驚きと感動のシーンに出会えます。

渡り鳥の飛び立ちは、自然の雄大さを五感で感じることが出来ます。

ここ伊豆沼は現在の栗原市、登米市にまたがり、最寄の駅は東北新幹線の「新田駅」、東北新幹線の「くりこま高原駅」になります。話によるとこの沼の周辺の若柳に「野鳥館」、築館に「昆虫館」、迫に「淡水魚館」と言う施設が出来たらしい。

以前訪れたときには「新田駅」側に栈橋があり、餌をやりによくの人が集まり、玉こんにやくなどを売る屋台らしきものが出ていた記憶があります。迫の施設の線路近くに、物産館らしき建物が出来、地元野菜や花、この地域で作られたハムが売られ、レストランではこれらを使った食事までできると言います。

早朝、日が昇る前に友人がこの場所（迫）に連れてきてくれましたが、寒い中沼を囲む道には望遠カメラを三脚に取り付けてシャッターチャンスをつとめるカメラマンが点々と白い息をはいていました。

暫くして明るくなると、沼中央にいたガンやカモ達が、沼に張った氷をバシバシ踏み壊しこちらへ向かって行進して来ます。その後、一群のガンが飛び立つと、つられていつせいに残りのガンが羽ばたいて餌を求めて飛んで行きました。夕日に飛翔する優雅な興奮にも負けない風景でありました。

こちらのサンクチュアリセンターには望遠鏡が設置され、訪れた人が観察や軽食が出来るスペースもあります。

夏の蓮祭りには極楽浄土を思わせる景色となり、ここで採れる「ジュンサイ」は「くりこま高原駅」でも購入できました。

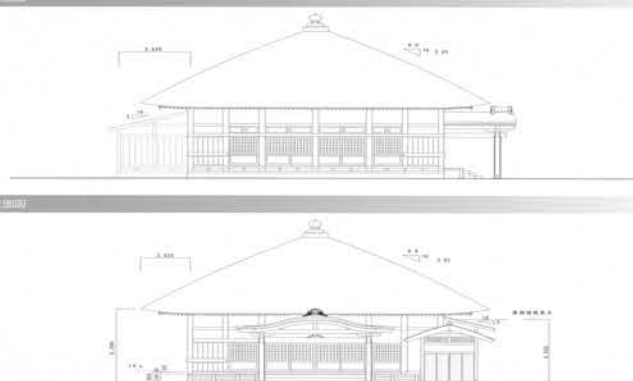
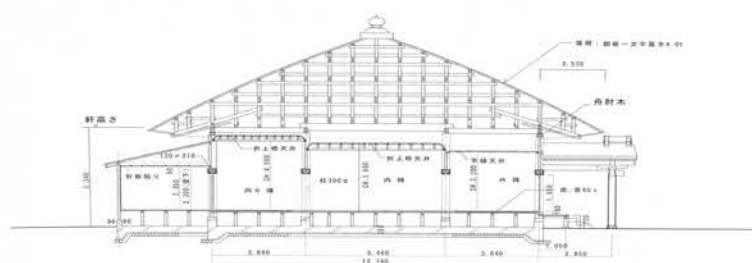
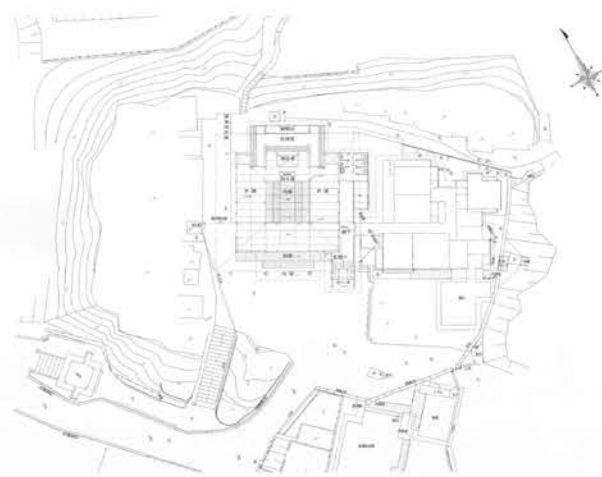
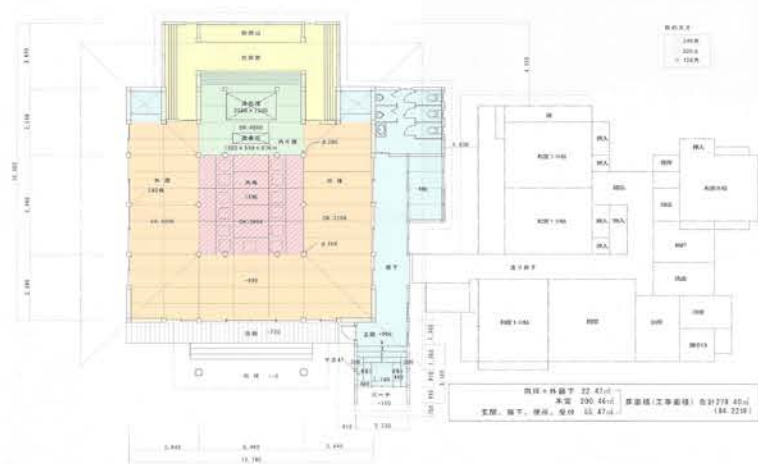
地元でカメラマンとしてこの風景を写し、発信、保護に当たっている方々。周辺の住民とともに長沼、内沼も含めてずっと守ってもらいたいものであります。



桃源院本院本堂復興再建計畫 計畫図

(仮称) 桃源院 本堂新築計画 2013. 7. 6

株式会社i設計エンジニアリング



平成26年度 春彼岸合同供養会のご案内

陽光が春の息吹を感じさせる季節、みなさまには益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

今年も春彼岸合同供養会を下記日程にてご案内いたします。
 毎回、10時の部・12時の部は大変混み合いますので、14時の部の参加をお願いいたします。
 是非、みなさまお誘い合わせてお参りください。

同封の申込用紙にご記入の上、3月10日（土）までに郵送かFAXにてお申し込みください。

☆ 尚、ご不明な点や、お問い合わせは桃源院までお早めに連絡をお願いいたします。

電話 0425-83-1133
 FAX 0425-83-1134

平成26年度 春彼岸合同 供養会	3月22日 (土)	10時の部	12時の部	14時の部
	3月23日 (日)	10時の部	12時の部	14時の部

供養料 一霊 一万円

塔婆料 一本 二千円

口桃源院駐車場は満車が予想されます。当日は各開式30分前から豊田駅北口より送迎バスを運行いたします。どうぞご利用下さい。

□法話・御詠歌・簡単なお食事・お抹茶・お菓子もごさいますのでお誘い合わせの上お参りください。

□『欠席供養』

当日欠席にての供養をご希望される方は、申し込み用紙に「欠席」とご記入の上、お手数ですが現金書留にてお申し込み下さい。
 ご供養の上【供養記念品】をお送りいたします。

(ー 〃) ドヤッ!

<日本にある「世界一」識字率>



日本の識字率は、数百年に亘って世界一を誇る。

江戸時代の幕末期においては、武士はほぼ100%読み書きができたという。

庶民層でも男子で49～54%は読み書きができた。

同時代のイギリスでは下層庶民の場合、ロンドンでも字が読める子供は10%に満たなかった。

1945(昭和20)年、大東亜戦争に敗れた日本は、母国語を失いかねない危機に見舞われた。

戦争中、玉砕するまで戦い抜いた日本人を見たアメリカ人は、「日本

人は間違った情報を伝えられていて、正しい情報を得ていないに違いない。なぜなら、新聞などがあのように難しい漢字を使って書いてある。あれが民衆に読めるはずはない。事実を知らないから、あんな死に物狂いの戦い方をするのだ。だから、日本に民主主義を行き渡らせるには、情報をきちんと与えなければいけない。そのためには漢字という悪魔の文字を使わせておいてはいけない」と考えた。

1948年8月、CIEは「日本語のローマ字化」を実行するにあたり、日本人がどれくらい漢字の読み書きができるか調査を行なった。調査の結果、テストの平均点は78.3点で、日本人は97.9%という高い識字率を誇っていることが判明した。テストで満点を取った者は4.4%で、ケアレスミスで間違えたのではないかとという者が満点と認めてもよいという者が1.8%いた。合計すると6.2%(約500万人)が満点という好成績だった。CIEはこの結果に驚き、日本の教育水準の高さに感嘆し、「日本人の識字率の高さが証明された」との判断が大勢を占めた。そして実現されなかったのが「日本語のローマ字化」だった。圧倒的な識字率の高さが母国語の存続を守ったのである。